

[5] 強みを基盤にする・・・何事かを成し遂げられるのは、強みによってである。 弱みによって何かを行うことはできない。

① 自分の強みは分かりにくい

誰もが、自分の強みはよくわかっていると思う。しかし、たいていは間違っている。分かっているのは、せいぜい弱みである。

② 強みを知る唯一の方法

何かをすることに決めたら、「何を期待するか」を書きとめる。九ヶ月後、一年後に結果と照合する。 私自身これを五十年続けている。そのたびに驚かされる。誰もが驚かされる。こうして自らの強みが明らかになる。自らについて知りうることのうち、この強みこそ最も重要である。

③ 知的な傲慢を改めよ

知的な傲慢を改め、自らの強みを十分に発揮するうえで必要な技能と知識を身につけなければならない。

④ 自らの強みに集中せよ

不得手なことの改善にかなり時間を使ってはならない。自らの強みに集中すべきである。 無能を並みの水準にするには、一流を超一流にするよりも、はるかに多くのエネルギーと努力を必要とする。

⑤ 得意なやり方で仕事をせよ

仕事上の個性は、仕事につくはるか前に形成されている。 仕事のやり方は、強みや弱みと同じように与件である。修正できても変更はできない。ちょうど強みを発揮できる仕事で成果を上げるように、人は得意なやり方で仕事の成果をあげる。

⑥ 今さら自分を変えられない

今さら自分を変えようとしてはならない。うまくいくわけがない。自分の得意とする仕事のやり方を向上させることに、力を入れるべきである。

⑦ 人と組むかひとりで行うか

仕事のやり方として、「人と組んだ方がよいか、一人の方がよいか」を知らなければならない。組んだ方が良いのであれば、「どのように組んだときによい仕事ができるか」を知らなければならない。

⑧大組織で働くか小組織で働くか

知っておくべき大事なことがある。「緊張感や不安があった方が仕事ができるか、整備された環境の方が仕事ができるか」。「大きな組織で歯車として働いた方が仕事ができるか、小さな組織で大物として働いた方が仕事ができるか」。どちらでもよいと言う者はあまりいない。

⑨意思決定者か補佐役か

仕事上の役割として、「意思決定者と補佐役のどちらの方が成果を上げるか」という問題がある。補佐役として最高でありながら、意思決定の重荷に耐えられない人が大勢いる。

⑩価値観にあった組織で働け

組織において成果を上げるには、自らの価値観が組織の価値観になじまなければならない。同じである必要はない。だが、共存できなければならない。さもなければ心楽しまず、成果も上がらない。

⑪気質と個性を理解せよ

我々は気質と個性を軽んじがちである。だが、それらのものは訓練によって容易に変えられるものではないだけに、重視し明確に理解することが必要である。

⑫自らを知る者の振る舞い

自らの強み、仕事のやり方、価値観がわかっているならば、チャンスを与えられたとき、職を提供されたとき、仕事を任されたときに「私がやりましょう。私のやり方はこうです。仕事はこういうものにすべきです。他の組織や人との関係はこうなります。この期間内にこれこれのことをやり遂げます。」と言える。

⑬自らの価値を成果に変える

強みを生かす者は、仕事と自己実現を両立させる。自らの知識が組織の機会となるよう働く。「貢献に焦点を合わせること」によって、自らの価値を組織の成果に変える。

⑭最高のキャリアをつかむ

最高のキャリアは、計画して手に出来るものではない。自らの強み、仕事のやり方、価値観を知り、機会をつかむよう用意をしたものだけが手にする。なぜならば、「自らの得るべきところを知ること」によって、単なる働き者が、卓越した仕事を行うようになるからである。